

感動と上手さを創り出す

表現技法に偏ってはならない。技法は最低ルールだけでよい。
自らが感動していなければ、表現は上手くならない。

- 文章は一気に書け。——そして、じっくりと見直せ。
文章を書くときは、自らのしたことを表すのが、読み手にとっては最もバカバカしい。
発見したことを中心に、気付いたことを展開させるようにする。
そのために、見たことを書き留めよ。
- まず、感動をせよ。社会から、外(顧客、市場)から、感動を探せ。
——表現するとは、感動したことを、他の人に返すのと同じだ。
感動を得るには、日常を知らねばならない。自らの日常を分析しなければならない。
解説書を表す時も同じである。外から解説書を書けるようになるまで教わったのだ。
だから、教わったことを返すために書く。
- たくさんのフレーズを持て。——決め手のフレーズを探せ。
・自らのメモを作る、集める。・文学を読む、哲学を読む。そして、言葉を集める。
自らのメモからフレーズを探そうとしてはならない。
メモを積み上げると、自然にフレーズが産まれてくる。
但し、メモから探すと昔に戻り、今に合わないときがある。
- 約束事、前提を忘れるな。その中で、自らの得意を活かせ。
——活かされているとき、自らが輝く。
得意を使えば、上手く出来る。さらに得意になる。読みやすくなる。
- 未来に向かって書け。
今から未来を向いて、過去を、今をテーマにしても、次の手がかりになるように展開させる。

《文章独習》

- 書く前に読み込め。
たくさんの本を読んだ方が良い。エンタメも含めて、読みやすさ、文章の構造を学ぼう。
- 思想の修練
自らの視点、考え方を明らかにし、思考体系を作り出すようにしよう。
- 独創と模倣
文章練習は、書き写す練習よりも、自らの考え書くようにしよう。視点が広がり、独自の境地が開かれやすい。模倣は陳腐化しやすい。

《良い文章への姿勢》

- 何を書くか。何を主張するかを明らかにしてから書き始める。
- 偽らず書く。大げさにしてはならない。